

# 保育者養成校としての漢字教育に関する研究

Research of Kanji Character Education  
in a Childcare Teacher Training School

中 島 賢 介  
山 森 泉

高等教育機関において様々な対策が必要となっている学力低下問題に関し、その一分野である漢字力に焦点を当て、保育学科学生を対象とした指導を試みてきた。学科の特性を生かした指導法によりある程度の漢字力向上が確認できたが、日本語表現法における「語彙教育・漢字教育」のあり方についてはまだ模索段階である。何をもって必須事項とし、どこまでを身に付けさせるのか、さらに今後検討を深めていく必要がある。今回、専門分野に焦点を当てた漢字学習を継続して行うことで、漢字の定着と専門分野理解への導入が図られたことを、実践結果から報告する。

## 1. はじめに

漢字教育は、小学校から高等学校までの課程においてどのように実施されているのだろうか。学習指導要領<sup>1)</sup>には次のように記されている。

中学校学習指導要領の改訂の要点には、「確実に漢字の力を育成するため、生徒の学習の実態に配慮して、読みについては基本的に従前どおりにした。一方、書きについては読みに比べ習得に時間がかかるという実態を考慮するとともに、小学校修了までに学年別漢字配当表の第5学年までに配当してある825字の漢字について確実に書けるよう学習していることを踏まえ、小学校学習指導要領第2章第1節国語の学年別漢字配当表に示してある1006字の漢字を書き、文や文章の中で確実に使うことができるように」としている。

高等学校になると、字数の明確な指定はない。だが、常用漢字表における漢字数が1945字であることから、中学から高等学校までの6年間で習得する漢字は900字余りということになる。中学までの義務教育とは異なり、現状では、国語科の履修単位数は生徒の学習状況を把握した上、所定の範囲内において学校の裁量で行われている。

本研究は、本学における日本語表現法と保育者養成に関する専門科目との連携による授業実践に基づき、効果的な漢字能力育成のあり方を考察することを目的とする。この目的を達成するために、独自に作成した学習プリントを学生に解答させ、その上でアンケートを実施し、学生の学習形態や学力に関する実態を客観的に把握するという方法を採用した。

## 2. 授業実践

高等教育機関において必要とされる漢字力とは、どのようなレベルであろうか。これまでは就

職試験対策としての漢字力を中心に捉えていた面がある。しかし、先に述べたように学力低下が及ぼす影響で、就職試験以前に専門教育の履修・理解においてまず漢字力が必要とされる。具体的には、テキストの理解および、レポートを書くための語彙力・漢字力ということになるであろう。

この観点から考えると、保育者を志す学生にとって必要な漢字力とは、まず、実習日誌記録・実習レポート作成の漢字力をつけることではないだろうか。以下に記す実践記録は、筆者らが財団法人日本漢字能力検定協会からの助成を受けて行った研究成果報告<sup>2)</sup>の抄録をもとに、アンケート結果とその分析を大幅に追加したものである。

### (1) 実践の背景

本学を含めた多くの保育者養成校において、昨今の学生の言語表現について指導に苦労している。実習施設から寄せられる日本語表現に関する苦情を整理してみると、口頭表現と文章表現の2点に集約できる。

まず口頭表現に関しては、「挨拶ができない」、「言葉遣いが悪い」、「返事はいいが行動に移せない」などの苦情である。このうち、挨拶や言葉遣いなどは習慣化により解決が可能である。だが、「返事はいいが」という苦情は、本当に理解しているのかといった理解力の問題である。これは、対策を講じることが極めて困難である。場面に応じて、事前に行動するのか質問後に行動するのかといった問題を瞬時に察知し行動する力が求められているからである。

次に、文章表現において「誤字脱字が多い」「話し言葉になっている」「実習日誌に今日の気づきが書かれていない」といった苦情に対応しようとする時、それが「表記レベル」の問題なのか、それとも「内容レベル」の問題なのかによって指導のあり方が異なってくる。特に、「日誌に今日の気づきが書かれていない」といった類いは、それが実際どういう状況であったのか、子どもや保育者はどのような表情をしていたのかなど、具体的な場面を想定して指導する必要があり、単純な表記の指導の範囲を超えてしまう。

従来、「実習指導」の時間では、具体的な一場面をどう切り取るか、そこからどのような学びができたのかなど、「内容レベル」に関する指導が主であった。そのため、学生の「表記レベル」への意識が希薄になってしまい、「日本語表現法」の時間ではきちんと表記・表現できるにも関わらず、実習指導の時間や実習の記録では正しく書けないという事態を引き起こしていた。「日本語表現法」の授業では問題を感じなかった学生が、保育の専門科目の文章表現に関して注意や指摘を受けることに、筆者らは「一体なぜそういう現象が起きるのか」という疑問を感じた。

その原因の一つは、学生が一つ一つの科目を別個のものと捉えているという点にある。高等学校まで、国語・数学・理科・社会・英語などといった科目は、それぞれ独立した別個科目として指導されている。特に入学試験などでは、必要な科目や不要な科目といった分け方ができるような環境で育ち、苦手な科目を避けて通ることもできる。しかし、専門教育機関である養成校に入ると、ほとんど全ての科目が、「保育」という言葉を中心に緊密に連動して展開している。科目によっては、内容が重複する場合も多い。言い換えれば、各科目を総合化して「保育」とは何かを考える学習が学生に求められているといえる。つまり「学びの総合化」<sup>3)</sup>と言ってよい。

「日本語表現法」担当教員である筆者らは、保育学科以外の学科でも、社会人として必要な文章表現や口頭表現の習得を目標に「日本語表現法」を担当している。保育学科においては、それに加え、実習指導にも関わっている。そのため、保育学科においては、他学科と比較してより保育の場面に絞った演習を行い、学習の動機付けや必要性を実感させながらスキルを身に付ける工夫をしてきた。この考えをさらに発展させて、一つの科目が複数の専門科目に連結していて、ある科目で学習した事柄が他の科目の学習において役に立つといった経験をさせることはできないだろうかという意図で実践したのが、今回の報告である。

## (2) 実践の方法

今回の実践の対象者は、2005年度に入学した保育学科1年生112名である。本学では、2年間の養成課程で幼稚園教諭2種免許と保育士資格、社会福祉主事任用資格が取得できる。実習は2年間で約60日間、幼稚園と保育所、保育所を除く児童福祉施設に赴き、子どもと直接関わることで子どもの育ちや環境を理解する。卒業後の進路は、2004年度卒業生では73.1%が保育所、22.1%が幼稚園に続き、施設が3.8%、企業が1%と、圧倒的に保育者として活躍しており、例年同様の傾向である。

入学制度のうちの推薦制で合格した受験生には、毎年『漢字学習ステップ』<sup>4)</sup> 2級もしくは準2級のテキストを一冊仕上げる課題を出している。

本学において基礎科目である「日本語表現法Ⅰ」「日本語表現法Ⅱ」は、幼稚園教諭免許取得に必要な「教科に関する科目」として位置付けられている。Ⅰでは文章表現を、Ⅱでは口頭表現を中心に表現能力の向上を目指しており、今回の実践は「日本語表現法Ⅰ」において実施した。

まず、文部科学省から発行されている『幼稚園教育要領』<sup>5)</sup>と、厚生労働省から発行されている『保育所保育指針』から短文を抜粋し、専門用語などの語句をカタカナにして問題文を作成した。(「咀嚼」や「嚙下」などは読みを問うた。)短文にした理由は、語句のみでは文脈が不明瞭で、どの箇所にもその語句があるかを見る際の確認作業を簡便にするためである。問題文は、下記表の通り全6回に分けた。

表 問題文の構成

回	テキスト	章：内容
1回	幼稚園教育要領	第1章 総則 第2章 ねらい及び内容 健康
2回	幼稚園教育要領 保育所保育指針	第2章 ねらい及び内容 第3章 指導計画作成上の留意事項 第1章 総則 1 保育の原理
3回	保育所保育指針	第1章 総則 1 保育の原理 第2章 子どもの発達 第3章 6か月未満児の保育の内容
4回	保育所保育指針	第3章 6か月未満児の保育の内容 第4章 6か月から1歳3か月未満児の保育の内容

5回	保育所保育指針	第5章 第6章 第7章 第8章	1歳3か月から2歳未満児の保育の内容 2歳児の保育の内容 3歳児の保育の内容 4歳児の保育の内容
6回	保育所保育指針	第8章 第9章 第10章 第11章 第12章	4歳児の保育の内容 5歳児の保育の内容 6歳児の保育の内容 保育の計画作成上の留意事項 健康・安全に関する留意事項

授業には毎回『幼稚園教育要領』と『保育所保育指針』を持参させ、授業開始時から15分程度、問題文に取り組みさせた。解答時間終了後、隣座席の学生と答案を交換し、誤答の場合は正しい字を朱字で書かせるようにした。これは、相互チェックを行うことにより、他者の立場で見る、読む人の立場になって書くことについての認識を深めることをねらいとするものである。また、互いのために正しい字を書くという責任感を持たせるためでもある。

こうした相互チェックは高校段階までの漢字テストなどでも行われているが、本実践でのねらいは以下の2点にその特徴を挙げることができる。

一つは、採点中や採点後に学生から語句に関する質問が多数なされた際の対応である。教員の説明は、極力辞書的な意味にとどめ、「〇〇の授業で〇〇〇を学ぶ際に使用するのでよく聞くように」という指示を出した。これは、学びを「日本語表現法」の時間に留まらず、他の科目への橋渡しとしての位置づけを強調し「学びを総合化させる」ためである。

もう一つは、採点者・解答者ともに名前と簡単なコメントを記入させたことである。つまり、自分の答案が戻ってきた際に、自分の書いた語句の正否を確認し、誤字がある場合には各自正しい字を書いた上で、簡単な感想を書かせるようにしたのである。これにより、「できた、できない」というその場だけの確認で終わるのではなく、自分の誤答を自覚させる効果が生じた。

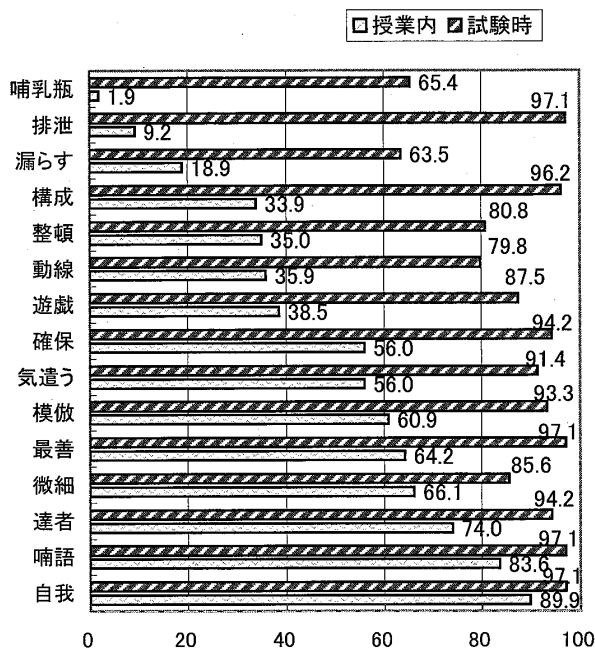
### (3) 単位認定試験の結果

単位認定試験前には、漢字はプリントの範囲内から出題することを告知し、学習効果を確認するため、試験では正答率の異なる語句を15問出題した。正答率はグラフ1のように、向上が見られた。(数値は%)

- ① 幼児の活動をカクホする。
- ② 衣服の着脱、食事、ハイセツ。
- ③ 幼児のドウセンを配慮した園庭。
- ④ 乳幼児のサイゼンの利益を考慮する。
- ⑤ 秘密は正当な理由なくモラさない。
- ⑥ 保育所の施設、屋外ユウギ場
- ⑦ 授乳中のホニユウビンに触れる。
- ⑧ 見つめる、追視する、ナンゴを発する。

- ⑨ 興味を持ったり、モホウしたりする。
- ⑩ ジガが順調に育っている証拠。
- ⑪ 手指などのビサイな運動の発達。
- ⑫ 他人の心や立場をキヅカう感受性。
- ⑬ 自分の持ち物をセイトンする。
- ⑭ 言葉がタッチャになる。
- ⑮ 適切な環境コウセイや援助。

グラフ1 授業時と試験時の正答率変化



### 3. 事後アンケート

実践の効果とレポート記述、漢字記載に関する調査を目的に、全ての授業が終了した2006年2月上旬、学生にアンケート調査<sup>6)</sup>(アンケート内容は本文末参照)を行った。対象学生は、「日本語表現法」I・IIの履修を終えた保育学科1年生101名と

2年生118名、コミュニティ文化学科1年生101名、食物栄養学科1年生90名である。

今回実践を行ったのは保育学科1年生のみであるが、実践以前に学習した保育学科2年生(以下1年生、2年生とする)や、教育内容の全く異なる他学科との比較をすることで、実践対象の保育学科1年生の効果が明らかになると考えたからである。(質問内容はほぼ同一であるが、実習の有無の関係から、他学科の学生には一部レポートに限定した質問を行った。)

中心となる質問項目は以下の通りである。

- ① 授業で課されるレポートの記述手段はワープロか手書きか
- ② 実習日誌を記入(他学科はレポート作成)する際の悩み
- ③ 漢字が曖昧なときの対応
- ④ 書く分量や漢字力について高校時代との比較
- ⑤ 漢字プリント授業の効果に関して(保育学科1年生のみ)

#### (1) レポート作成

グラフ2は「特に指定がない場合、レポート作成をどのように行っているか」という質問に対する回答である。手書きでレポートを作成する割合が74.4%である食物栄養学科につき、保育学科2年生66.1%、1年生では50.5%と過半数がレポートをいつも手書きにしているのに対し、コミュニティ文化学科では「一定しない」45.5%、「いつもワープロで作成する」が36.7%と、であった。

手書きの理由として、2年生は「字の大きさやレイアウトが自由に出来るから」が最も多く33.9%、次いで、「手書きの方が早いから」33.1%、「どこでもレポートが作成できるから」25.4%、「字を書くのが苦にならないから」12.7%と答えている。食物栄養学科では、「手書きの方が早いから」が45.6%と多く、次いで、「どこでもレポートが作成できるから」が37.8%で

あるほか、「家にワープロがないから」と物理的に不可能であると答えた学生も14.4%いた。

ワープロ使用の理由として、2年生、1年生、食物栄養学科は「書き直し(推敲)が楽だから」「ワープロの方が早いから」が多かったが、コミュニティ文化学科では「ワープロの方が早い

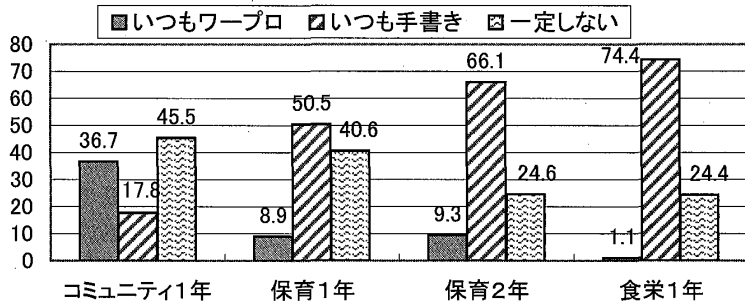
から」36.6%「漢字変換が楽だから(辞書を引かなくても済むから)」35.6%「ワープロの方が読みやすいから」といった理由も多く見られた。

ちなみに、保育学科では指導保育者に提出する実習日誌は毎日手書きで、しかもペンで書くことを義務づけている。それを意識して授業で課すレポートもあえて手書き指定にするケースもあるなど、ワープロ限定ではない。参考までに他学科の現状を把握するため、「レポートの書き方の指定では手書きとワープロのどちらが多くあったか」という質問をしたところ、コミュニティ文化学科では61.4%の学生が「ワープロ指定」と回答した。食物栄養学科では、「ほぼ同じ」が57.2%、「特に指定なし」が43.3%で、ワープロ指定は0%の回答であり、レポート記述に学科の特性が現れていると言えよう。<sup>7)</sup>

## (2) 実習日誌・レポート記入の悩み

「実習日誌(レポート)を書くときに困ったことは何か(複数回答可)との質問に対し、保育学科の回答で最も多い回答は、1・2年生ともに「書く内容はあるが、表現が思いつかない」という表現レベルの悩みであり、1年生73.3%・2年生59.3%に達する。実習の具体的な場面での記述を毎日まとめなければならない実習日誌ならではの悩みである。コミュニティ文化学科・食物栄養学科では、「何を書いたらよいかわからない」がそれぞれ62.4%、62.2%と最多であり、レポートテーマの選定に苦心している姿が浮かび上がってくる。またコミュニティ文化学科の学生は、「内容を決めても書くのに時間がかかる」も61.4%と多く、保育学科1・2年生、食物栄養学科の44.6%、50.8%、46.7%に比べ、事実や体験を元を書く他学科と異なり、調べて書くことが多い学科の特徴が読み取れる。一方で「字を書くのが遅い」悩みは、保育学科、コミュニティ文化学科、食物栄養学科の1年生が11.9%、11.9%、13.3%であるのに対し、保育学科2年生は6.8%と低い。学科が異なるため単純比較はできないが、保育学科に関しては、実習を重ね経験を積むことによって書き方のコツをつかむのか、書くことでの悩みが減少していることがわかる。また、「漢字が思い出せない」との回答は、保育学科1・2年生、コミュニティ文化学科は14.9%、11.9%、12.9%であるのに対し、食物栄養学科は25.6%と約4分の1の学生が漢字表記に悩んでいるのが特徴的である。

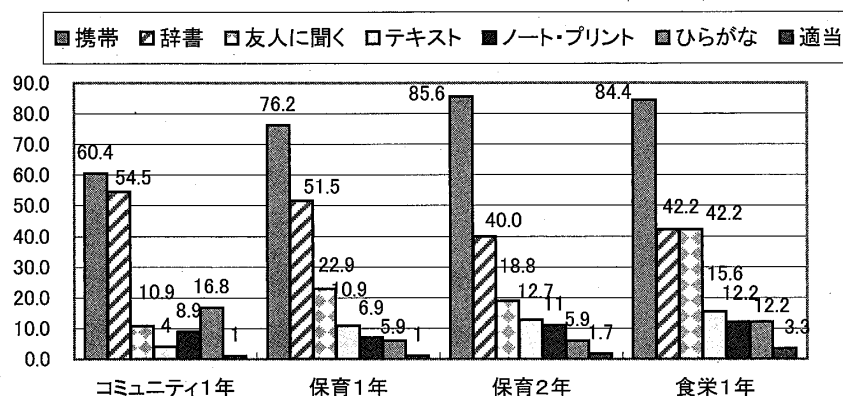
グラフ2 手書きでレポートを作成する割合



### (3) 曖昧な漢字

日誌・レポートを作成する際、漢字が曖昧な時は、学生たちはどうしているのでしょうか。この質問には、どの学科の学生もまず「携帯電話で確認」しており、保育学科1・2年生、コミュニティ文化学科、食物栄養学科の順に、76.2%、85.6%、60.4%、84.4%という結果である。「辞書を引いた」学生は同様に、51.5%、40.0%、54.5%、42.2%と少なくなっている。「適当に漢字を書いた」1.0%、1.7%、1.0%、3.3%、「ひらがなで書いた」5.9%、5.9%、16.8%、12.2%と比べれば、例え携帯電話であっても調べようとした姿勢を評価すべきであろうか。

グラフ3 漢字が曖昧な時



しかしながら、携帯電話では、画面の制約上横棒が2本か3本かというような正しい表記の確認が困難であり、同音異義語の場合、意味を確かめて書くことはできない。したがって、書いたつものの漢字が間違っていることが起こりうる。細部にまで正確さを求められる漢字表記においては、やはり辞書を引く習慣を継続させるべきではないだろうか。コミュニティ文化学科の学生が他学科に比べて携帯電話での確認が少ないのは、ワープロで書く割合が高いことも関連していると思われる。(グラフ2参照)

誤字脱字については、どの学科の学生も「簡単な字」や「自分で気づいていなかった字」について指導を受けたケースが多い。「自分で気づいていなかった字」は、保育学科1・2年生、コミュニティ文化学科、食物栄養学科の順に、28.7%、41.5%、30.7%、33.3%であり、「簡単な字」での間違い指摘は、同様に、27.7%、31.4%、18.8%、40.4%という結果である。簡単な字の誤字では、「達」の横棒が一本足りない、「余裕」の衣扁が示扁になる、などが挙げられる。「簡単な字」の誤字指摘が他学科に比べて少ないコミュニティ文化学科では、「難しい字」について20.8%の学生が指導を受けている。保育学科1・2年生、食物栄養学科では、12.9%、7.6%、13.3%である。

### (4) 高校時代との比較

④の高等学校との比較として、まず書く分量の違いを尋ねた。どの学科も「高校までの方が多かった」と回答した学生は少数であり、保育学科1・2年生、コミュニティ文化学科、食物栄養学科の順に、9.9%、12.7%、21.8%、24.4%である。それに対して、「短大に入ってからの方がたくさん書いた」と回答した学生は、同様に79.2%、73.7%、58.4%、61.1%と圧倒的に短大

の方が「書く分量」が多いのである。(グラフ4参照) 高校時代の50分授業に比べ短大では90分授業が基本となるため、1回の授業につき学習内容(=書く量)が多いことに加え、試験に代わるレポート提出を求められていることも、高校時代との量の差を実感する要因と言えよう。

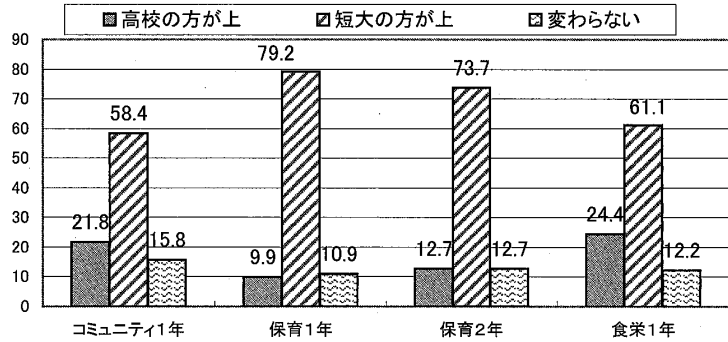
このように高校時代に比べて書く分量が増えている中で、高校時代と現在の漢字力について学生はどのように感じているのであろうか。グラフ5を参照していただきたい。実際の書く力そのものを遡って比較測定することは不可能であるため、あくまでも学生本人がどう感じているかを回答してもらった結果であることをお断りしておく。

保育学科1年生以外は、約半数の学生が「漢字力自体は変わらない」が最も多く、コミュニティ文化学科、食物栄養学科では、「高校時代の方が上」と回答した学生が33.7%、38.9%いる。保育学科1年生では「漢字力自体は変わらない」37.6%をやや上回って、「短大時代の方が漢字力がある」39.6%と答えている。2年生および他学科では、「短大の方が漢字力がある」と答えた学生が19.5%、12.2%、17.8%と少ないことと対照的である。一つの理由として、保育学科1年生は、1年間の授業を通して漢字書き取り実践(漢字プリント)に取り組んできたことが挙げられるであろう。しかも、正否をチェックして終わりの単なる語句の確認に留まらず、日々の授業に直結している語句であることで、これまで国語の授業でしか取り組まなかった漢字に、継続的に親しみ練習してきたからではないだろうか。

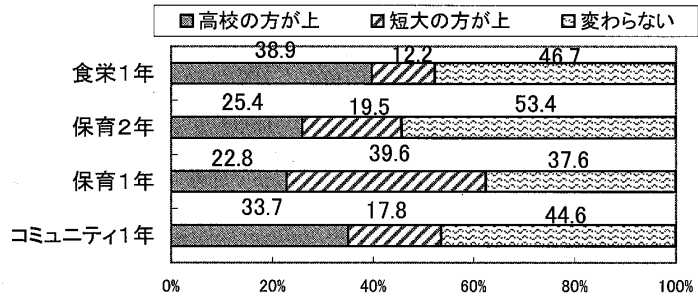
(5) 授業の効果

「日本語表現法で使用したプリントについて当てはまるもの」を選ぶ質問は、今年度授業実践を開始した保育学科1年生のみに行った。(複数回答可。グラフ6参照)「専門用語を理解するようになった」53.5%を筆頭に、「漢字を勉強するようになった(漢字で書くことが増えた)」32.7%、「幼稚園教育要領や保育所

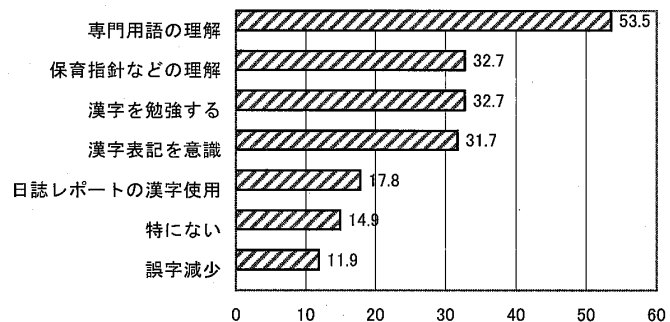
グラフ4 文章を書く量の比較



グラフ5 漢字力の比較



グラフ6 漢字プリントの効果





保育指針を理解するようになった」32.7%、「漢字表記を意識するようになった」31.7%と続き、「特にない」14.9%を大きく上回った。漢字プリントに取り組むことで、漢字表記を意識し、漢字の勉強をするようになることは予想されたことであるが、半数を超える学生が「専門用語を理解するようになった」ことを挙げていることは、「学びの総合化」という視点から特筆できる。

#### 4. 結果からの考察

##### (1) 専門用語の難易度について

今回は、そのほとんどが常用漢字で構成された語句について出題した。通常、専門用語といえば、難易度の高い字<sup>8)</sup>で構成され、かつ読みづらい字を連想する。先行研究としては、角田(2003)の医療従事者および看護学生に対する専門用語に関する報告<sup>9)</sup>がある。これと比較すると、保育関係の専門用語の多くは常用漢字で形成された、かつ難易度の低い字である。

しかし、実際に出題し学生に解答させた際、これらの正答率が低いという事実直面する。(「戸外」が書けないなど。)しかし、これを単なる若者の語彙不足とするのは短絡的である。むしろ、この事実は漢字の難易度と正答率が一致していないということを示しており、プリント問題を解いた学生の感想やアンケート結果の誤字脱字指摘に関する回答が、それを裏付けている。誤字脱字に関して、学生は「自分では簡単だと思う字」「自分では気づいていなかった字」を間違えているのである。

この現象とは逆に、「喃語」という、漢字検定であれば1級レベルの字が含まれた語句の正答率は、プリント、単位認定試験ともに高かった。範囲を指定した後のプリント学習であるため、学生の事前学習の成果といえよう。だが、同じ1・2級レベル<sup>10)</sup>の字が含まれる「哺乳瓶」については正答率が伸びていない。「喃語」は、「乳児保育」や「乳幼児発達心理学」などの授業でも取り上げられるが、「哺乳瓶」は「乳児保育」の授業のみで扱い、しかもその語句が出てくるのが前期のみという授業での出現頻度にもよると思われる。

##### (2) 誤答パターン

教育・保育実習を考える会編『改訂版 幼稚園・保育園実習の常識』<sup>11)</sup>には、保育者を志す学生に多く見られた誤答の一覧表がある。今回、この誤答例を踏まえて出題したところ、実際に誤答した学生のパターンは、前書とほぼ同様の傾向であった。<sup>12)</sup>

#### 専門用語の誤答例

##### 1) 誤答のパターン1 (専門用語以前)

出題されたほとんどの漢字は、日本漢字能力検定の2級まで(常用漢字1945字及び人名漢字)の字である。にもかかわらず、次のような誤答があった。

最も端的な例は、七割以上の学生が「コガイ」を「戸外」と正しく書けないことである。「個外」「固外」「孤外」などの誤答が見られた。「戸」も「外」も、小学校学習指導要領の学年配当表によれば小学校2年生で学習する漢字である。<sup>13)</sup>また、この語を正しく読めない学生もいる。「戸」が教育漢字であるにもかかわらず、多くの学生は、「戸」は出入り口の「ト」という語彙しか持っていない

いのであろうか。つまり、小学校2年生レベルの簡単な字であっても日常使わず耳にしない字は、読めないのである。読めない字だから意味が分からず、結果として簡単な漢字であっても書けないのである。さらに「構成」を、「講成」、「更正」や「更生」といった同音異義語による誤りも多く見られた。

## 2) 誤答のパターン2 (専門用語)

「午睡」「排泄」(子どもの生活パターンに関する語句) などをはじめとして、学生にとって目新しい語句などは、漢字そのものが易しいものであっても正答率が低い。他に、「動線」「補完」「採光」「遊戯」「哺乳瓶」「囑託(医)」「嘔吐」「排尿間隔」「罹患」「片言」「構音」「旋律」「守秘義務」「軟膏」「虐待」といった語句に誤答が目立つ。まだ履修していない専門科目で扱う語句に関しては、漢字テストの短文だけでは、2種類のテキストを勉強してきたとはいえ、意味を十分に理解しないまま解いている学生も目立った。

## 3) 誤答のパターン3 (その他)

『改訂版 幼稚園・保育園実習の常識』と重複した語句として、「栽培」「創意工夫」「雰囲気」「徐々に」「午睡」などを出題した。いずれも正答率が低く、誤答例と学生の誤答はほぼ一致していた。相互チェックする学生から、正確に記憶していなかったことを自覚した結果、「惜しい」「もう少しだったのに」との感想が多く出た語句である。

これらの誤答のパターンを見ると、まだ保育現場での実習を経験していない学生に、文脈が分かるように短文で出題しても漢字そのものの学習にはそれほど意味がないことが分かる。その語句を、授業や実習を通して体験の中で理解することに直結していないからである。つまり、文脈があっても何のことか分からなければ、語句そのものを学んでいるという実感が湧かないということである。これは保育専門用語に限らず、漢字学習・語彙指導を行うに際し、心しておかねばならないことである。

本実践は、単に専門用語の漢字を正しく表記することに留まっていない。むしろ、この実践の目的は、先述した通りあらゆる授業へと繋げる導入であり、学習への動機付けとして意味を持つ。入学した時点で、自分が「先生」と呼ばれる職業に就くという自覚が高い学生もいれば、なかなか高まらない学生も存在する。漢字検定2級や準2級を持っている学生でも、実際に解いてみると、検定試験の盲点である「漢字能力の一過性(漢字能力を保持し続けることの困難さ)」を実感する。漢字そのものの使用頻度が低ければ低いほど、その字は忘却の彼方へと追いやられてしまう。検定試験のためだけに覚えたものは、日常生活で使用しなければ忘れてしまう。これから現場で使用する言葉を中心に覚えれば現場でも正しく使用できるという点で、動機付けはある程度達成されたのではないだろうか。

## (3) 単位認定試験の結果から

「単位認定試験では8割を目指そう」と学生に鼓舞した結果が、表1の通りである。正答率の

低かった「哺乳瓶」も、最終的には60%以上の正答率が得られた。最も正答率が向上した字は「排泄」であった。「泄」は漢字検定1級レベルの字であるため、試験ではそれほど向上することはないと予想していたが、出題した中では97%以上と正答率が高い。

多くの学生にとってこれらの漢字を練習するのは、「日本語表現法」の授業で範囲出題にあった時と単位認定試験に備えての学習する時の2回である。しかし、1年次における保育所・幼稚園での実習合計15日間、学生は毎日の日誌に必ず「一日の流れ」を記入しなければならない。幼稚園でも保育所でも、日課の中に「排泄」の時間を記すので、学生は自覚無自覚に関わらず「排泄」を何度も記入しているのである。実習指導では、実習日誌でよく使う漢字一覧のプリントを配布して練習を促すほか、日誌で見られる誤字脱字や好ましくない文章などの実例を挙げての指導を行う。また、その授業時間内で「日本語表現法」担当者として文章表現に関するアドバイスをすることもある。教員間の連携によって授業を行うことで、「学びの総合化」、すなわち、学生がそれぞれの科目を繋げて学習する姿勢を身につけることができた一つの証拠でもある。

## 5. 今後の課題

### (1) 保育職の専門性とは

ワープロを多用する他業種（主に事務職）とは異なり、保育職はまだまだ「手書き」することが多い職種である。60日間にも及ぶ実習の毎日、日誌を記入しさらに、指導案、レポート作成を求められる。書くことが苦手な学生にとって、実習を乗り切れるかどうか記録にかかっている面もある。また、就職してからも連絡帳記入のほか、園便り作成など、文書作成は避けて通れない。

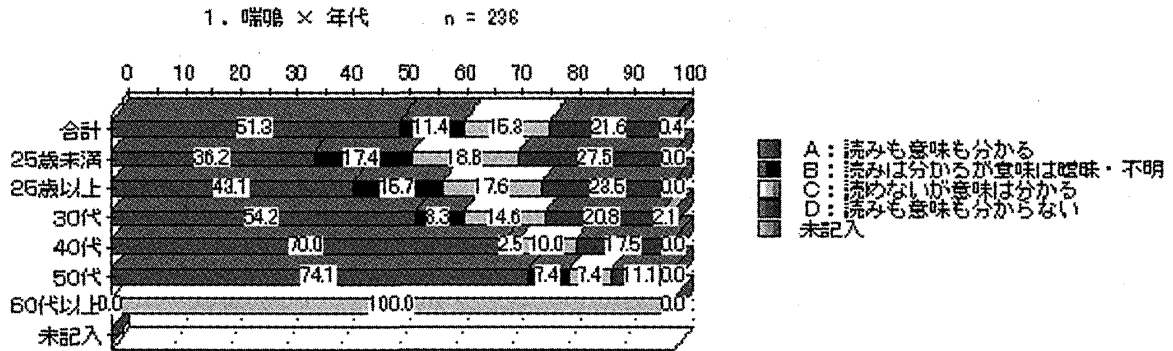
一方で、アンケートから興味深いデータが得られた。それは、2年生対象の「漢字の使用や日誌記録に関して、1年次と比べて変化があったか」との問いに、「使用する漢字がだいたい決まっているので、書けるようになった」との回答が35.6%もあったことである。確かに、専門職である以上、使用する用語は限定されてくる。その用語の意味を正しく把握し、反復練習することで正しい字を適宜使用することが可能になる。

今回の授業実践とは別に、2006年度前期授業において保育学科1年生対象に、「小児保健実習」のテキストに出てくる語句の理解度調査を毎回の授業の範囲にあわせて行った。これは学生の語彙理解の実態を調査する目的によるものである。

学生には、抜き出した語句について以下の印を付けてもらった。「A：読みも意味もわかる。注釈不要。B：読みはわかるが意味は曖昧、不明。C：読みはわからないが意味はわかる。D：読みも意味も不明。注釈必要。」授業内において11回実施したものを、理解度の低い順（Dと答えた学生が多い語）から並べ替え、授業担当者との協議の上で、必要度が高い（保育者として理解しておいてほしい語）と判断される25語を選んだ。これらの語について金沢市を中心とする保育士にアンケートを実施し、学生との比較を行った。<sup>14)</sup>（詳細については別の稿で報告する。）

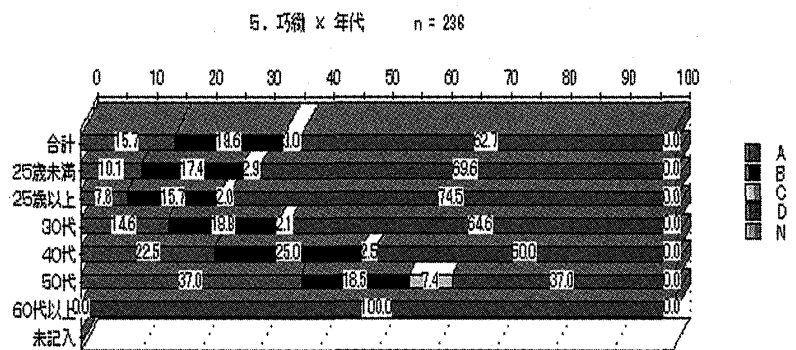
その結果、使用頻度が低いものでは学生とさほど差がない語がある一方で、経験によって理解が増す語があることが分かった。グラフ7は「喘鳴」（ぜんめい・ぜいめい：気管に痰などが絡んで、ぜいぜいと音がすること）についての集計である。80%の学生が読みも意味もわからないと答えているが、現職保育士たちは、半数が読みも意味もわかると回答している。興味深いのは、年代

が上がるごとに、その割合が増加していることである。学校で学んだ知識が、現場で実施体験することにより理解語彙となっていくことがはっきりと分かる。また、学生たちの72%が「D」とした語に「巧緻」<sup>15)</sup>がある。これについては保育士全体の6割が「D」と回答している。(グラフ8参照) テキスト内においては内容理解に必要な語句であっても、日常生活・保育場面で使う必要がなければ、若い年代では学生ときほど大きな差がないことの一例といえる。



短大で基礎を押しさえ、現場で経験を積むことで、必要度の高い後ほど語彙理解が増すと考えられる。この調査のデータ分析は中間報告であるため、他の語句を含めた詳細は別の機会に報告したい。

しかしながら、現場での経験や必要によって語彙力・漢字力の向上が見られる(必要な語句は現場で習得する)としても、基本的事項に関しては短大で学んでおくべきであり、今後そのための指導法をさらに検討していく必要がある。



## (2) 展望

保育専門用語は、他の専門職に比べると難易度の高い字は少ない。よって、誤字脱字を未然に防ぐには、これらの字を確実に覚えることが求められる。しかも、こうした字は一旦覚えてしまえば比較的正確に書くことができる。だが、一方で、平易な字であるからこそ注意が必要である。簡単な字で書けるからといって学習を怠るのではなく、むしろ平易な字が適切に書けるよう正答率の低いものを中心に学習を進めていくことが有効である。

また、漢字自体がいかに平易な語句であっても、その言葉がどのような科目で学習するのか、指導者が学生にその意味や文脈を意識させて取り組まねば意味がない。実践で使用したテキストは2種類のみであり、他のテキストで使用する語句や、現場で使用される頻度の高い語句の習得などには課題が残る結果となった。授業科目ごとに担当教員から頻度の高いものや誤答の多い語句についての助言を受け、実践に生かすことができれば、さらに専門性との関わりを深められる

のではないかと考える。

この実践において得られた成果を整理すると次のようになる。

- ①辞書を引く習慣を、高等教育機関でも継続させるべきである。
- ②専門分野のテキストを利用し範囲を指定して学習させる方法は、学習者に目的意識と意欲を与える。
- ③学生個人または学生同士の気づきを大切に相互評価は学習効果がある。

今回の研究報告は、先述した通り比較的読字が平易であるものを選択し出題した際の成果である。しかし、語彙教育においては、実際に保育現場で用いられる読字困難な用語についての考察も必要である。次回は、読字困難な専門用語の習得において、「日本語表現法」がいかに関与教育に関わることができるかといった課題に取り組んでみたい。

## 参考資料 アンケート

### 漢字・文章表記に関する調査協力をお願い

#### 1. 授業で課されるレポートの記述に関して

①レポート作成時に手書き・ワープロの指定がない場合、あなたはどちらでレポートを作成しましたか。

ア いつもワープロ      イ いつも手書き      ウ 一定しない（その時による）

【ウの人は以下に回答してください。複数回答可】

エ 急ぐ時はワープロ      オ 急ぐ時は手書き

カ 枚数（字数）の少ない時は手書き

キ 枚数（字数）の少ない時はワープロ

ク 最初はワープロが多かったが、次第に手書きに変わった

ケ 最初は手書きが多かったが、次第にワープロに変わった

②ワープロ（パソコン）を自宅（アパート）に持っていますか。

ア 持っている      イ 持っていない      ウ 実家に帰った時はある

③あなたはレポートを書くとき、ワープロと手書きのどちらが楽に書けますか。

ア ワープロ      イ 手書き      ウ どちらとも言えない

エ 以前は手書きだったが、ワープロに変わった

オ 以前はワープロだったが、次第に手書きに変わった

④【③でア・エと回答した方へ】ワープロでのレポート作成をするのは主にどのような理由ですか。

ア 漢字変換が容易だから（辞書を引かなくて済むから）      【複数回答可】

イ 書き直し（推敲）が楽だから

ウ 分量調節（字数制限）が容易だから

- エ 字が汚いから (自分の字が読みにくいから)
- オ 漢字 (正しい字かどうか) に自信がないから
- カ ワープロの方が早いから
- キ コピーをとらなくても手元にレポートが残るから
- ク ワープロの方が読みやすいから

⑤【③でイ・オと回答した方へ】手書きでレポートを作成するのは主にどういう理由からですか。

- ア 字を書くのが苦にならないから 【複数回答可】
- イ 手書きの方が早いから
- ウ 自分の字が好きだから
- エ 手書きの方が読みやすいから
- オ 字の大きさやレイアウトが自由に出来るから
- カ どこでもレポートが作成できるから (家でなくても出来るから)
- キ 家にワープロがないから

2. 実習日誌に記入に関して (①②は保育学科のみ、他学科は※1)

①実習日誌を書くときに困ったことは何ですか。【複数回答可】

- ア 何を書いたらよいか分からない
- イ 書く内容はあるが、表現が思いつかない
- ウ 内容を決めても書くのに時間がかかる
- エ 字を書くのが遅い
- オ 漢字が思い出せない
- カ その他 ( )

②実習日誌を書いている漢字が曖昧な時はどうしましたか。【複数回答可】

- ア 辞書を引いた
- イ 携帯電話で確認した
- ウ 前の実習日誌を見た
- エ 授業のプリントを見た
- オ 友人や家族に聞いた
- カ 適当に漢字を書いた
- キ ひらがなで書いた
- ク その他 ( )

③誤字脱字の注意を指導者から受けたことがありますか。

- ア 一度もない
- イ たまにあった
- ウ 時々あった
- エ いつもあった

④誤字脱字の指摘を受けた字は、どんな字が多かったのですか。【複数回答可】

- ア 難しい字
- イ 簡単な字
- ウ 専門用語
- エ いつも同じ字
- オ 毎回違う字
- カ 自分で間違えて覚えていた字
- キ 自分でも間違いを自覚していた字
- ク 自分で気づいていなかった字

⑤ひらがなで書いた字を漢字に直されたことはありますか。

- ア 一度もない
- イ たまにあった
- ウ 時々あった
- エ いつもあった

3. 高等学校からの連続性について

①高校までと短大に入ってからでは、文章を書く分量はどのように変化しましたか。

- ア 高校までの方がたくさん書いていた
- イ 短大に入ってからの方がたくさん書いた
- ウ 分量自体は変わらない

②高校時代と現在とでは、漢字力が変化したと思いますか。

- ア 高校時代の方が漢字力があつた（短大に入ってから漢字力が衰えた）
- イ 短大の方が漢字力がある（短大に入ってから漢字力が向上した）
- ウ 漢字力自体は変わらない

【1年生に対して】（保育学科1年生のみ。保育学科2年生には※2）

「日本語表現法Ⅰ」（中島先生の授業）で使用した漢字プリント（テスト）の効果について

当てはまるものはどれですか。【複数回答可】

- ア 漢字を勉強するようになった（漢字で書くことが増えた）
- イ 専門用語を理解するようになった
- ウ 保育指針や教育要領を理解するようになった
- エ 実習日誌やレポート作成時の漢字使用が苦にならなくなった
- オ 実習日誌での誤字指摘が減った
- カ 漢字表記を意識するようになった（辞書などで漢字を確認するようになった）
- キ 特にない

※1 コミュニティ文化学科・食物栄養学科

3. レポート作成に関して

①レポートを書くときに困ったことは何ですか。【複数回答可】

- ア 何を書いたらよいのか分からない
- イ 書く内容はあるが、表現が思いつかない
- ウ 内容を決めてもまとめるのに時間がかかる
- エ 字を書くのが遅い
- オ 漢字が思い出せない
- カ ワードプロがうまく使えない
- キ その他（ ）

②レポートの書き方の指定では、手書きとワードプロのどちらが多くありましたか。

- ア ワードプロ
- イ 手書き
- ウ ほぼ同じ
- エ 自由（特に指定なし）

③レポートを手書きで書いていて漢字が曖昧な時はどうしましたか。【複数回答可】

（すべてワードプロでレポートを出した人は解答しなくてけっこうです）

- ア 辞書（電子辞書を含む）を引いた
- イ 携帯電話で確認した
- ウ テキストを見た





## 保育者養成校としての漢字教育に関する研究

- 13) 財団法人日本教材文化研究財団の「生きる力が育つ漢字の学習」の調査研究では、小学校2年生対象に行ったテストで、「戸外で遊ぶ」を読めた割合は23.6%、書き取りの正答は20.4%、無答38.3%、誤答41.3%となっている。「戸を開ける」は、同様に92.7%、87.7%、3.6%、8.7%という結果である。<http://jfecr.or.jp/index.html> 2006年10月17日
- 14) アンケートは2006年8月～9月に、日本保育協会石川県支部加盟の保育所を中心に、石川中央地区の109園に郵送で依頼、回収を行った。各園に10部ずつアンケートを送付し、回答者ができるだけ幅広い年代になるように協力を依頼した。回答は自記式で行い、園単位で一括して返送してもらった。
- 回収数は82園で回収率は75.2%である。回答者が10名に満たない園もあるため、総回収数は785、このうち年代・経験年数などが未記入のため無効とした47枚を除き、有効回答枚数は738である。
- 今回は、中間集計として、約3割にあたる25園236名の集計結果を報告する。年代の構成は25歳未満29.2%（総数での割合は26.2%、以下同じ）、25歳以上30歳未満21.6%（22.4%）、30代20.8%（23.3%）、40代16.9%（16.0%）、50代以上11.4%（12.2%）である。
- 15) テキスト本文中では、「巧緻」は以下の文脈で用いられている。
- 「安全能力の身体的な面には、危険から瞬間的に身を守る敏捷性、瞬発力、巧緻性や身体のバランスを取る平衡性などがある。」『小児保健実習』同文書院 p.161